

第39期ミドルグループ研修 STE っ子視察団



タイトル「多様性を大きな力に」

研修機関：2019年7月17日～8月1日

研修国：アメリカ

研修機関：AccessLiving、CDR、accessboard、ADAセンター、

ギャローデット大学、ロチェスター工科大学

研修テーマ：「クロスマイノリティ」の実践現場から学ぶ次世代の当事者運動

研修目的：・多様な人々が参加する運動のあり方を学ぶ

・自立生活センター内の「実践」を確実に持ち帰る

はじめに

私たちは「クロスマイノリティ」の実践現場から学ぶ次世代の当事者運動をテーマに、シカゴの Access Living、ロチェスターの Center for Disability Rights を中心に、ADA センターや accessboard、障害学生を支援しているギャローデット大学やロチェスター工科大学などに研修に行き、多様な人が参加する運動のあり方を学んできました。

私たち3人が所属する自立生活センターSTEP えどがわにはじめて聴覚障害をもつ自分(鈴音)が入り、聴覚障害者が過ごしやすい環境を作っていたことで聴覚障害を持つ人が少しずつ関わりはじめるようになりました。このことから、日本の CIL にも車椅子ユーザーだけではなくもっといろいろな障害種別や生きづらさを抱えた人たちが集まって、ひとりひとりの多様性を大切にしたセンターにしていけたらいいなと思うようになりました。「実践」を持ち帰るために、障害種別・性的指向・性自認・人種・年齢・言語などを超え様々な人たちが集まりみんなで熱い運動している2つの CIL での研修を希望し、今までもこれからも一緒に運動をしていく仲間と3人で行かせていただきました。



田中鈴音



【多様性を大きな力に】

今回の研修で CIL に関わっている聴覚障害者とたくさん出会うことが出来ました。

なかでも、聴覚障害リーダーとして強い運動をしている権利擁護活動家の2人、アクセシビングのアンバーと CDR のジョナサンとはたくさんの時間を共に過ごし、たくさん話をしました。アンバーは聴覚障害者や LGBTQ などを中心にいろんな生きづらさを抱えた人たちの権利擁護運動を主に行っています。ジョナサンは権利擁護をはじめ、熱い抗議活動にも積極的に参加していま

す。彼もまた聴覚障害者だけではなく、いろんな仲間たちのために闘っています。

日本の CIL では聴覚障害者とはなかなか出会えません。それは聴覚障害者が活動することができる環境が整っていないことが前提にあると感じています。聴覚障害者にとって情報保障がなくセンターに情報アクセスできないことは、車いすユーザーで例えるとセンターに入るのに入口に段差があるためアクセスできないということと同様になります。本来ならば、最初からセンターに情報を保障できるものが存在していることが望ましいということです。その取り組みが多様性を受け入れることのメッセージにもつながります。

元々、アメリカでは自立生活運動とろう者の運動が同時進行されていたことにより、車いすユーザーとろう者が一緒に活動をするということがあったという背景があります。その為、CIL にもろう者のスタッフが入ってくるような環境をつくるという考えに自然に繋がったのかもしれませんが。アクセシビングの代表はろう者に入ってもらおうと思った時にまず手話通訳者を雇ったという話も聞きました。当事者が身近にいることが重要だと感じました。CDR では、CIL ではまだ珍しいろう・盲ろう者向けの通訳/通訳介助サービスも担っていて、ろう者や盲ろう者が地域生活を続けるためのサービスも提供しています。例えば就職を希望している聴覚障害者で、履歴書を記入するのに第一言語が手話であるため、英語が苦手な人へのサポートを行ったり、美術館などに行つてろう者の客への対応方法のトレーニングをおこなったりもしているそうです。

スタッフもとにかくいろんな人がいて、そのなかで、CDR で行われる会議では、手話通訳はもちろん、文字通訳や資料がある場合は拡大文字、点字、事前にメールで送るなど個人のニーズに合わせた対応を徹底して行っており、誰も取り残さないという姿勢が強く伝わってきました。

また、アクセシビングでもセンター内の会議には必ず手話通訳者がついており、もし、都合が合わず手話通訳者を準備できない場合は会議そのものを中止にするそうです。外部の会議などでも聴覚障害スタッフが参加した時に情報保障が不十分だと感じたなら、アクセシビングのスタッフ全員が参加しないそうです。

私は仲間たちひとりひとりの境遇が違って、話をすれば分かり合える、想いを共有しあえ

るといふ気持ちが大切であると信じています。これからも引き続き仲間たちを大切に思う気持ちを一番に当事者運動を続けていこうと心に誓いました。

研修中、通訳者が同行してくれたことによっていつでも通訳者のサポートを受けられたことは私にとって有意義な時間でした。必要な時に必要なサポートを受けられることで私が得られる情報量も増え視野が広がり、選択肢も増える。コミュニケーションが遠慮なくとれることも喜びでした。そのことから聴覚障害者にも聞く権利、知る権利があること、それを尊重してもらう必要がある事をもっと主張していきたいと思うこともできました。サポートして下さった皆さま本当にありがとうございました。

曾田 夏記



【「ウェルカム」からはじまる多様性】

○心からの「ウェルカム」

「レインボーフラッグが入口に掲げてあるコーヒーショップでは、心が安らいでいるな、って感じるの」。これは、シカゴの自立生活センター (CIL)「アクセスリビング」の副代表で LGBTQ 当事者のデイジーさんが語った言葉です。デイジーさんは続けて、「アクセスリビングの受付に、大きなレインボーフラッグが掲げてあるのに気づいたでしょ？あれは、私たちのセンターを訪問する LGBTQ のひとたち、それはまだカミングアウトしていない人たちに対して、『ここは、あなたを心からウェルカムしている場所だよ』というメッセージをハッキリと伝えるためなの。」と言いました。私は、「心からのウェルカム」が、「CILにおける多様性」を考える時にやはりとても大切なことだと感じました。

私の中で、「多様性」「障害種別を超えて」という言葉を聴く時、また自分が発する時に、ずっとどこかで違和感がありました。それは、この「心からのウェルカム」と「必要なサポート」がない中で形だけ整えられる「多様性」は、誰の、何のための「多様性」なんだろう？という違和感でした。「多様性」「障害種別を超える」こと自体が目的化し「やらないといけないこと」になるほど、不安や義務感から「必要なサポート」は用意されても、(あなたがここに来てくれてうれしい)という「心からのウェルカム」は失われてしまうと感じました。逆に、自分たちの多くとは「ちょっと違う人」が私たちのセンターのドアをたたいてくれた時に「心からのウェルカム」と、その気持ちが前面に出ているような徹底したサポートがあれば、「多様性」はあとからついてくるのではないかと思いました。

○「クロス」しにゆく私たち

アクセスリビングの取り組みで印象的だったことは、「障害」コミュニティから「LGBTQ」や「不法移民」のコミュニティに手を伸ばし、パートナーシップを積極的に強化していたことでした。そして、それら実践の背景には、「そうしない限り、『障害のある不法移民』『障害のある LGBTQ』といった複合的な差別を受けているひとりの仲間を本当の意味では救

えない」という、現場に根差した強い理念がありました。取り組みの中には、「障害」と「不法移民」のそれぞれの分野で活躍する弁護士たちをつなぐものや、地域の LGBTQ 団体と相互にスタッフ研修をしあうなどの実践がありました。アクセシビリティのスタッフが、経験から（こうした取り組みを通じ）「両方のコミュニティが強くなる（Both will be stronger.）」と確信をもって語っていたことが印象的でした。

米国 CIL の「実践の現場」から学んだことは、次世代の障害者運動を強くするのであれば、センターの中にとどまらず、もっともっと外に出ていかなければいけないということでした。自分たちの団体の中にとどまっている限り、「クロス」する現象は当然おきないからです。障害種別の異なる人たちとも、異なる理由で差別をされている人たちとも、さまざまな理由で生きづらさを感じている「健常者」の人たちとも、つながることはできないままです。アメリカの障害者運動の強さは「ADA 法を作る時に多様な人が参加したことが出発点」という話を、今回多くの場面で耳にしました。「ADA 法の父」と呼ばれるジャスティン・ダート氏は、自分が経験していない「さまざまな差別」を学ぶことが出来る人だった、とジュディ・ヒューマン氏が述べています。未だ見聞きしていない「差別」を学ぶために自ら足を運び、さまざまな人と交わり（「クロス」し）、共通の信頼関係と深い相互理解の中で同じ目的のために一丸となれる、そんな次世代の障害者運動を作っていきたいと思います。

工藤登志子



【「誰も取り残さない」という覚悟】

私はシカゴ、ワシントン DC、ロチェスターそれぞれの訪問先で多くの障害者リーダーとお会いする機会を頂きました。彼らと直接話し、同じ時間を過ごしていくうちに、どのリーダーも”常に”、自分以外の誰かのために”本気で行動しているという共通点に気が付きました。

・情報保障が整っていない会議には聴覚障害を持つスタッフだけでなく全てのスタッフが参加しない

・車いす使用者が入れない飲食店はアクセシブルになるまで歩けるスタッフも利用しないと話すアンバーさんは、シカゴの Access Living で聴覚障害の当事者としてセンター内の環境整備や情報保障、権利擁護に取り組んでいます。私がアンバーさんとの会話の中で特に印象的だったのは、勤務中だけに留まらず日常生活全てにおいても常に意識が徹底していたことです。例えばアンバーさんはご自身の自宅も段差をなくし、車いす使用者やどんな重度の障害を持つ人でも入れるようにしていました。車いすを使用していないアンバーさんにとっては、自宅の段差解消は必ずしも必要不可欠な環境整備ではありません。しかし、センターの仲間が”誰でも”遊びに来られるようにとの思いでアクセシブルにしているのです。

車いす使用者である自分自身に置き換えてみると、車いす使用者のアクセシビリティについて考えることはあってもその他のマイノリティの人々にまで常に意識を向け続けるこ

とは出来ていませんでした。逆に、私は（車いすに乗っているから）同僚や友人宅に行けないのも仕方ないと、周囲との壁を感じつつも諦めていた部分がありました。しかし、「仕方ない」で終わらせることなく、人生をかけて徹底的に誰も取り残さない、公私共に常にインクルーシブであり続けようとするアンバーさんの影響力は大きく、周囲のスタッフも彼女に引っ張られているようでした。そのような姿はワシントン DC で会ったジュディ・ヒューマンさん、ロチェスターで会った DRC 代表のブルースさんを始めとする多くの障害者リーダーたちも同様でした。私は彼らから今後の障害者運動に必要な考え方を学ぶことが出来ました。

あらゆるボーダーを超えた仲間たち

NCIL カンファレンスでは、トランプ大統領の政権下で移民政策が進んでいるアメリカを象徴するように人種や肌の色、民族、宗教等に対する差別を訴える声も多数上がっていました。日本の障害者団体が主催するカンファレンスではこのような光景を見ることはありませんが、アメリカの障害者リーダーたちの多くは、「障害者」以外のアイデンティティも併せ持ち、障害者団体以外の組織とも積極的に繋がっていました。アフリカ系アメリカ人のケリー・グレイさんは障害当事者として、黒人として、女性として、さらには次世代を担う若手リーダーとしてそれぞれのコミュニティで先頭に立っていました。そして、アジアから来た、日本語を母国語とする私たちを「仲間」として受け入れてくれました。また、シカゴの Access Living、ロチェスターの ADR ではスタッフ全員が総力を挙げて私たちを歓迎してくれ、少しでも多くの時間を一緒に過ごそうとしてくれました。それぞれのバックボーンが異なっても、「誰も取り残さない」という共通理念があればみんな安心して繋がっていられる。そして「障害者運動のコミュニティはどんな人でも歓迎されるべき。」だと実感しました。今回の研修で得た知識や気づきを大切に、これからの日本での活動に生かしていきたいと思えます。

さいごに

私たちは今回の研修を通して 1 人が対峙している問題はみんなにとっての問題でもあるという意識を持つことが重要だと感じました。生きづらさを抱えている人たちの声を聞くことは当然、色々な理由で声を上げられない仲間たちもたくさんいるはず。その仲間たちの声を拾い上げることも今後しっかり行っていく必要があるとも感じました。多様性を尊重し合うこと、お互いを分かり合うことはきっとできるはず。これから私たちのセンターで、私たちの活動に入ってくれる仲間を増やして、仲間が抱えている問題を一緒に考えていきます。そして誰一人取り残されることなく、ひとりひとりの多様性を見つめられるセンターにしていきます。今回、愛の輪の研修にいかせていただき、さらにたくさんの方々にお力添えいただいたおかげで、わたしたちが目指している活動へ向けてのヒントを得ることが出来ました。サポートくださったみなさん、ありがとうございました。私たちはこれからも、より一層仲間たちが生きやすい社会になるように力を合わせて活動していきます。

